

高等学校の英語授業における Oral Introduction の具体的方法とその効用

萩原 一郎

1. はじめに —Oral Introduction (オーラル・イントロダクション/口頭導入) とは

『英語教育用語辞典』では、Oral Introduction を以下のように説明している。

主に読解指導において、新教材の意味内容を教師が目標言語を用いて口頭で説明すること。新出文法事項についての構造中心のオーラル・イントロダクションもあるが、意味内容についてのストーリー中心のものが一般的である。オーラル・イントロダクションは、教師がその日に扱う教材の意味内容を既習の語彙や表現を使って、わかりやすく語って聞かせるものである。全体の意味を直感的に把握する能力を育てることを目的とする。

オーラル・イントロダクションの問題点としては、一方的に教師が語り、学習者がそれを聞く、受け身の活動になってしまうことが指摘されている。この問題を解決するために、教師が学習者に質問をしながら新教材の内容を理解させていく、相互交流的な口頭導入も提案されている。これはオーラル・インタラクション(oral interaction)と呼ばれるもので、教師が内容に関する答えやすい質問を目標言語で次々に行い、学習者の反応をつなぎ合わせながら教材のストーリーを説明していくものである。学習者の知識や経験を教材の内容に結びつけて、学習者の興味・関心を高めることも重視される。このような相互交流的な口頭導入によって、学習

者の積極的な言語活動を可能にしながら、新教材の導入をスムーズに行うことができると言われている。

本稿で論ずるOral Introductionはストーリー中心のもの(story-centered)のみとし、使用する教科書教材は高校1年生用のものである。最初に、英語の授業においてOral Introductionを行うことによどのような効用があるかを論じ、続いてOral Introductionを実際に教室で行う上での留意事項を細かく論じていく。なお、各パートで例に挙げている英文は、10. にあげた教科書教材を使って私が実際に行ったOral Introductionから抜き出したものである。

なお、Oral Introductionは1920年代以降にHarold E. Palmerが提唱したThe Oral Methodで重視される指導方法である。

2. Oral Introductionの効用

(1) 先行研究

『英語指導技術再検討』によれば、story-centeredなOral Introductionのねらいとして以下の4つがあげられている。

- ア. 英語の音になれさせる
- イ. 学習の雰囲気づくりに役立つ
- ウ. 直聞直解の訓練をする
- エ. 直読直解への橋渡しをする

また、村野井は『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』の中で第二言語習得理論から見たOral Introductionの効用を以下のように論じている。

- ア. 学習者の背景知識を活性化させる
- イ. 理解可能なインプットを学習者に与えることができる
- ウ. 新出言語項目の形式・意味・機能のつながりを学習者にコンテキストの中で提示することができる

(2) 筆者の経験

私自身、長年授業の中でOral Introductionを重視しながら教えてきた。私は県立高校6校で教えてきたが、いずれも進学校ではなく、どちらかというと英語を苦手とする生徒が多く在籍する高校で生徒と授業をつくってきた。そのような学校では一般的に予習は期待できず、教師側でも予習を要求はしてこなかったため、たとえ新出語句について事前に練習しておいたとしても、いきなり教科書を開いて本文を読ませると、ほとんどの生徒は自分で理解することはできない。そこで、Oral Introductionを通して教科書本文について概略的なイメージをもつことで、教科書を開いたときにその知識を活かして、ようやく自力で読めるようになるのである。私が教えてきた生徒たちにとってOral Introductionは欠くことのできない、しかも英語学習上たいへん有益な授業過程であると自信をもって言える。

(3) 高校生が語るOral Introductionの有効性

それでは私の授業を受けてきた高校生たちはOral Introductionについてどのような印象をもっているのだろうか。私は年度末に生徒に授業内の各活動についてかなり詳しいアンケートに答えてもらっている。以下にあげるのは、5つの高校（英語が苦手な生徒が多い学校、総

合学科の高校、中堅校など）におけるOral Introductionに関する生徒のアンケート結果（図1、図2）である。「とても役立つ、役立つ」で73%、継続を希望している生徒が79%と総じて好意的な反応をもって受け止められていると言える。生徒たちは以下のような効用があると述べている。

- 本文の内容が分かりやすくなる
- 本文のイメージがわく
- リスニング力アップにつながる
- 予習しなくても本文が分かる
- 教科書に書かれていない情報も得られる
- 単語の発音が分かる

以下に生徒へのアンケート結果を示す。

1. 教科書を開く前に、黒板に写真や絵、キーワードを貼りながら、英語で説明をしました。この活動についてどう思いましたか。

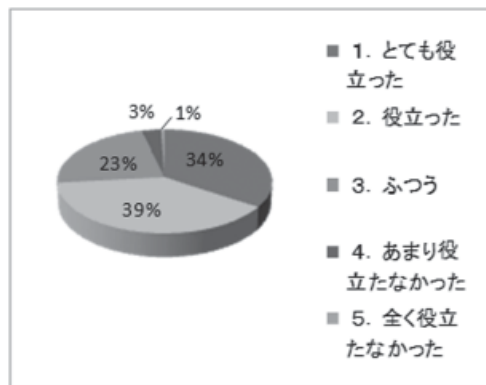


図1: Oral Introductionの有効度

2. (1.の活動について)「とても役立つ」「役立つ」と答えた人は具体的にどのような点で役立つのか書いて下さい。(以下の回答は抜粋)

 - ・教科書を読むときに分かりやすい。いきなり教科書だと分からなくていやになる。でもあんまり時間かけると飽きることもあった。

- ・教科書をいきなり読んでも分からないので、最初にやってくれることで大体的内容が分かるような気がしました。
- ・教科書を読んでもどんな話なのか最初はイメージできないので、開く前に写真で説明されるとイメージしやすい。
- ・自分なりに頭で内容を考えて、文をつくることができた。説明がわかりやすくて本文の大事な場所をおさえることができた。
- ・頭の中でテストの時もその写真を想像してできた。

3. (1. の活動について) 今後の授業であった方がいいですか。

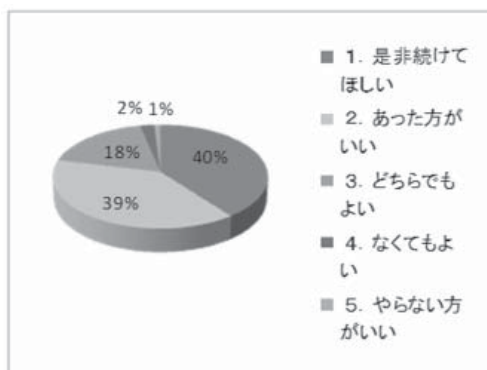


図2 : Oral Introduction の継続希望

このように様々な効用が指摘される Oral Introduction であるが、授業で行うためにはどのような準備が必要になるのであろうか。

3. Oral Introduction の準備

(1) テキストを読み込む

まずはまっさらな気持ちで教科書の文章を読んでみる。よく理解できない箇所は辞書や文法書で調べる。教師用指導書 (Teacher's Manual) を参考にするのもよいが、頼りきりにならず、必要などころを参照する程度にしたい。あくまで教師には主体的な教材研究が求められる。

(2) 背景知識、教科書で省かれている情報を調べる

原典があるものは原典にあたる。インターネットも大いに役に立つ。教科書編集の過程で、英文を省略したり、書き直したり、具体的な情報を抽象化していることがあるので、Oral Introduction ではこれを逆に具体化していく必要がある。以下の例では、シンガポールでは路上にゴミを捨てると、逮捕されるという記述が教科書にはあるが、調べてみると罰金を課されるということもあるようである。そこで、具体的な当時の金額をインターネットで調べて紹介した。

So you have to pay a fine. How much?
 You have to pay 500 Singapore dollars.
 One Singapore dollar is about 70 yen now.
 So it's about 35,000 yen. So you must not throw away chewing gum on the street in Singapore.

(3) 授業の出口 (生徒の発表活動など) を何にするか考える

7. で詳しく触れるが、授業や各パート、単元が終わった後に生徒に課す発表活動を考え、それを可能にするためには、Oral Introduction でどのような仕掛けをしておくかよいかを考える。例えば、最後に story reproduction または story telling (いくつかのキーワードや写真・イラストをヒントに口頭で教科書内容を再生する活動) を課題とするのであれば、教師が行う Oral Introduction がそのモデルになる。

(4) Oral Introduction の原稿を考える

次に英語の原稿を具体的に考える。走り書きでもいいので、事前に用意し練習しておくことが必要となる。生徒に理解しやすいように、対比 (contrast) を使ったり、time order で展開するなど、板書プランも合わせて考える。生徒にする質問や、繰り返して言わせる部分を考

え、決めておく。私の経験ではこれをしておかないと、その場で生徒に話を振ることはやさしいことではないので、ついつい教師が1人で語り尽くすことになりがちである。これでは生徒との *interaction* が生まれにくくなり、授業に緊張感がなくなり生徒の理解度も落ちてしまう。

また、「授業は英語で行うことを基本とする」と学習指導要領上で示されてから、教師用指導書に *Oral Introduction* の例が掲載されることが増えたが、こちらもそのまま使えるということはまれである。目の前にいる生徒たちに理解できる *Oral Introduction* を自分で作り上げたい。

(5) *Oral Introduction* で使用する写真、絵を用意し、単語カードを作る

ラフな形でアイデアが固まれば、インターネットの画像検索で *Oral Introduction* に使える写真とイラストを探し、家にあるカラープリンターで印刷する。時間短縮のために、マグネットを裏に貼ってある柔らかいソフトカードケースに、印刷した画像を入れてグッズは完成

する。*Oral Introduction* の原稿をもとに、板書プランを大ざっぱに完成し、黒板に貼る単語カードも作成する。このような準備だけでも大変で尻込みしたくなるが、以前は教科書に載っている写真を拡大コピーしたり、写真を求めて図書館の本を探したり、*1,000 Pictures for Teachers to Copy* (Pearson Japan) などの本を見ながら *cut-out pictures* や *picture cards* を作っていたのだから、隔世の感がある。なお、本文がストーリーなどの *narrative* な文章のときには、適切な画像が入手できないこともよくある。そのような場合は、絵を描くのが得意な生徒にあらかじめ頼んで描いてもらうとよい。生徒にとっても、自分の描いた絵が授業で使われると励みになるようである。

(6) リハーサルを行う

原稿を何回も音読して頭に入れる。筆者の場合は通勤途中のバスや電車の中ということも少なくない。板書プランは極めて大切なので、空き時間を利用し、空き教室で実際に写真などを貼り、位置を確認しておく。しかし、原稿も覚え、リハーサルをするなど数時間も準備にかけ



図3 : *Furoshiki* — The Magic Cloth の板書プラン

る完璧な Oral Introduction を行うよりも、自分の中で調整できる範囲内で準備をして、とにかく 1 年間継続することの方がずっと大切なことである。Oral Introduction はあくまで授業の一部であって、すべてではないことを頭に置いておくべきである。

4. Oral Introduction を理解させるための手立て

(1) 教科書を閉じさせ、ペンを置かせる

生徒の attention point を黒板と教師に向ける。教科書を見ながら、あるいはメモをとりながら、教師の Oral Introduction を聞いても十分に理解することはできない。始める前に、"Close your textbooks or keep your textbooks closed. Look at me." などと言って、生徒に顔をあげさせ、注意を前方に集中することが重要である。

(2) 生徒に語りかけるように進める

Oral Introduction に慣れていないと、あらかじめ作っておいた原稿を丸暗記して、生徒が理解できているかどうかおまじなしに吐き出すということになってしまいがちである。聞き手である生徒と interaction をとるために生徒の顔を上げさせて、伝えたい内容を語りかけることが重要である。

(3) 生徒が理解できる英語で、反応を見ながら間をとって進めていく

生徒の顔を見ながら進めていると、その表情やしぐさなどで理解できているかどうか判断できるようになる。反応を確かめるために、数秒のポーズを意図的に置いてみたり、理解できていないと判断したら、英語をパラフレーズしてもっと易しい英語で語っていくなどの配慮が必要になる。生徒が理解できないだろうからと、同じ英語を続けて 2 回言ったり、英語を言ったあとにその日本語訳を言うことを繰り返してい

ると、生徒が英語を聞かなくなる可能性が出てくる。反応を見て、理解できていないと思ったら、先ほど述べたパラフレーズを使ったり、スピードを落として繰り返してみるなど教師側で調整を図る。

(4) 時間を長くしすぎない

教師が提示する英語を聞くという生徒の集中力を考えると、長くても 10 分以内にはおさめたい。10. で紹介した Oral Introduction の長さが限度であると考ええる。

5. Oral Introduction において新出語を理解させるための手立て

(1) Harold E. Palmer による意味提示の方法

Palmer は著書 *The Principles of Language-study* の中で以下の 4 つの方法をあげている。

(a) **By immediate association**, as when we point to the object represented by a noun.

durian を示すには本物の durian を教室に持ち込むことが一番いいが、入手が難しいなど現実的に困難な点も多い。そこで、durian の写真またはイラストを使うことになる。

(b) **By translation**, as when we give the student the nearest native equivalent.

impress を示すのに、Impress means "印象づける" in Japanese. と日本語を使用するものである。形容詞などなかなか英語でパラフレーズしづらい場合は有効な手であるが、英語の文脈の中で生徒に理解させたいので、できるだけ避けた方がよい。ただし、これは原則論であって目の前にいる生徒たちにこの方法がもっとも有効な場合は、日本語を多目に使用することはかまわない。

(c) **By definition**, as when we describe the unit by means of a synonymous expression.

impress を示すのに、To impress means "to make someone feel admiration and respect."

(*Longman Dictionary of Contemporary English*)のように英語で定義するものである。しかし、英英辞典の定義を聞いて理解できる高校生がどれほどいるであろうか。そのような生徒であれば、Oral Introductionなしに教科書が理解できるはずである。definitionを使う場合、目の前にいる生徒が分かる英語に教師がパラフレーズして提示しなくてはならない。

(d) **By context**, as when we embody the word of expression in a sentence which will make its meaning clear.

その語が使われている文脈や場面を提示して、分かりやすく説明する方法である。例えば、以下のMaathaiさんの気持ちを教師が感情移入して伝えれば、impressのニュアンスは伝わるはずである。

When Maathai came to Japan in 2005, she heard some Japanese people using the word *mottainai*. If Japanese people use something just once, and then throw it away, they say *mottainai*. She soon came to love the word. Maathai thought, "Wow! *Mottainai* is a great word! I love this word!" She was **impressed** by the word *mottainai*.

(2) 具体例をあげる

以下の例では、public places (公共の場所)を理解させるのに、school (学校), office (会社), library (図書館)の3つの具体例をあげている。具体例→抽象化という順序に気をつける。逆にしない方がよい。

Is it OK for you to eat a durian at home? Of course, it is OK. But you must not eat a durian in school, in the office, in a library—in public places. So eating a durian isn't allowed in public places.

(3) ジェスチャーを取り入れる

What shape is a *furoshiki*? Is it round? No, it is square. What do you use a *furoshiki* for? We use a *furoshiki* to wrap things in.

まず両手で丸を作りながら、次に両手で四角を作りながら発話する。実物の風呂敷を見せながら、実際にいくつかの物を包んで見せることで、wrap things inを実感して理解させることができる。ジェスチャーなどnonverbalな要素も生徒の英語理解を助ける大きな武器になる。

(4) 音声のあとに文字を提示する

音声で理解させることが先に来て、次に単語カードや板書でスペリングを見せてrepeatさせる。文字を最初から示して、それをrepeatさせるわけではない。Harold E. Palmerが*The Principles of Language-study*の"Gradation"の中で述べているように、"Ears before Eyes"の順序を守る。

(5) 既知の語句を言ってから、同じ意味の未知の語句を提示する

Oral Introductionの中で新語を導入するときに、その単語が使われている場面で生徒が理解できる英語を言ってから(「ああ、分かる!」)、それと同じ意味を表す新語を導入する(「ああ、その内容をこういうふうに言えるんだ」)。既知→未知へという順序を守らずに、これを反対にしてしまうと、生徒が理解する上での負荷が増すことになる。

以下の例は、生徒が知っている"many times"をきっかけにして、新出熟語の"over and over again"を提示したもの。

How many times can a *furoshiki* be used? Yes, a *furoshiki* can be used many, many times. It can be used **over and over again**.

同様に、既出語の *environment* を出し、Maathai さんがすべての人が手にすることが重要だと考えるものを具体的に出すことで、新出語 *environmentalist* を提示したもの。

Maathai was always thinking about the environment. *She felt it is important for everyone to have clean air, clean water and good land.* She was an **environmentalist**.

6. Oral Introduction を interactive にするための工夫

1. で引用した『英語教育用語辞典』によれば、オーラル・イントロダクションの問題点として、一方的に教師が語り、学習者がそれを聞く、受け身の活動になってしまうことが指摘されている。この欠点を解消するために、生徒と *interaction* をとりながら、Oral Introduction を生徒と一緒に作り上げるようにしていくことが必要である。その具体的な方法をいくつか挙げる。

(1) 意味が分かった英文や語句を繰り返させる

導入の中で生徒が理解したと教師が判断した重要な語句やキーセンテンスは生徒に繰り返させる。その際、まずクラス全体でリピートし、生徒個人レベルできちんと言えているか確認するために、列ごとに数人の生徒に言わせ、最後にもう一度クラス全体でリピートするとよい。

(2) 質問をする

もっともよく使われる方法であろう。教師が質問を投げかけ、生徒に答えさせ、その答えをうまく活用しながら話を展開していくとよい。質問はクラス全体に投げかけ、生徒1人ひとりが自由に答えられる雰囲気を作っておくと、スムーズに流れる。

Can you see what she was holding?
Yes, it is a *furoshiki*.

(3) クラス内調査を行う

生徒を巻き込むために、質問を投げかけ生徒に挙手をさせ、クラス内調査を行う。

Have you ever used a *furoshiki* before?
If you have used a *furoshiki* before, raise your hand. Thank you.

(4) クイズを取り入れる

クイズが好きな生徒は多い。簡単なクイズを投げかけることによって、生徒を Oral Introduction に巻き込んでいく。以下は、生徒にとってなじみのない果物 *durian* についてヒントをどんどん与えながら考えさせる例。

Next, look at this. Do you know what this is? This is a fruit. This fruit looks like an egg or a ball. The color is yellow. It is grown in Southeast Asia. This fruit has many thorns. This fruit is sometimes called “the king of fruits.” Yes, this is a *durian*.

(5) ペアで話し合わせる

質問をしたあと、ペアでその答えを短時間で話し合わせて、答えを言わせる。1人では即答しにくい質問や、深く考えさせるような発問を与えるときに使う方法である。欠点としては、Oral Introduction の流れが中断してしまうこと、そして話し合いが英語で行われず、日本語で行うことになると、英語で通しているリズムが崩れるということである。生徒の状況に応じて、取り入れるとよい。

7. Oral Introduction を構成する際の工夫

(1) 既出文法事項を組み込む

新出の文構造や文法事項が出てくると、教師は使われる状況が分かるように英語で導入した

り、日本語で分かりやすく説明したり、確認のための練習問題を生徒に解かせるなど一生懸命定着に向けての努力をするが、意外なほどに定着率は低い。むしろ、その後さまざまな形で生徒に何回もその文法事項にふれさせることが重要である。以前の課で扱った新出文法事項について、Oral Introductionの中に組み込み、生徒が教師の英語を聞く中でそれを新しい文脈で理解することは重要である。一方で、該当の文法事項が使われていることに「気づく」ということはかなり困難なことなので、教師が話すときにそれを強調するなどの工夫が必要である。

"Furoshiki—The Magic Cloth"では、前課 Lesson 6 の "Ogasawara—A Laboratory of Evolution"における新出文法事項の3点についてOral Introductionの原稿に入れて構成した。

* S + V + O [= whatなどの節] (いわゆる間接疑問文)

- *Do you know who this is?*
- *Maathai thought about what she could do to change this situation.*
- *Can you see what she was holding?*

* It is[was] + 形容詞 (+for...) + to 不定詞

- *She felt it is important for everyone to have clean air, clean water and good land.*

* 助動詞 + 受け身

- *How many times can a furoshiki be used?*
- *Yes, a furoshiki can be used many, many times.*
- *It can be used over and over again.*

(2) 該当パートまたはレッスンで目標とする最終活動を見据えておく

このパートでは、story reproduction (story retelling) を配置し、写真とキーワードを使って Wangari Maathai さんについて、そして風

呂敷と紙袋の違いについて口頭で説明することを最終目標とした。教師側で想定した story reproduction は以下のようなものである。

Wangari Maathai was a Kenyan environmentalist. She received the Nobel Peace Prize in 2004. When she came to Japan in 2005, she was impressed by the word *mottainai*. It has been spreading around the world since 2005.

Using *furoshiki* is eco-friendly. If you use a paper bag, you may throw it away after using it. Unlike a paper bag, a *furoshiki* can be used over and over again.

そこで、story reproduction で生徒が発話する可能性が高い以下の英文や語句はOral Introductionで導入し、生徒が意味を理解したと判断したところで、教師のあとについて繰り返し言わせる。このように、授業の最初に行うOral Introductionで表現の仕込みをし、その後負荷を変えた音読活動などでそれを強化しておく、最終活動をスムーズに行うことができる。

《リピートさせた英文》

- **Maathai received the Nobel Peace Prize in 2004.**
- **She was impressed by the word *mottainai*.**
- **The word *mottainai* has been spreading around the world since 2005.**
- ***It can be used over and over again.***

《リピートさせた語句》

- **Wangari Maathai** • **Kenyan**
- **Green Belt Movement**
- **environmentalist** • **eco-friendly**

8. Oral Introduction とその前後の活動

(1) Oral Introduction 前の活動

Review から Oral Introduction へ口頭でスムーズに移行する

"*Furoshiki—The Magic Cloth*" の例では、初めてこの課に入るので、授業をいきなり Oral Introduction で始めることにした。一方、"*So Many Countries, So Many Laws*" では、Part 1 を前時に扱ったため、これが復習 (review) 教材となり、Part 2 が新出教材となる。以下の例で、review からどのように Oral Introduction につないでいるのかを確認していただきたい。

review を oral work で行っているかぎり、この2つの活動をつなげることは難しくない。review の内容を前時に使った picture cards などを使って、Q & A など生徒と interaction をとりながら確認し、一部の英文を繰り返させたあと、教師が

"Today, we are going to look at the laws of an Asian country."

と言い、Oral Introduction にスムーズにつなげている。

なお、review で生徒に家庭学習の課題とした story reproduction をグループでやらせたり、数人の生徒を教室の前に出させて presentation をやらせることもあるが、こちらも同様に Oral Introduction につなげやすい。

(2) Oral Introduction 後の活動

Oral Introduction → reading questions を示して生徒が自力で読む → explanation

Oral Introduction が教科書内容をほとんどカバーするものであったとしても、それだけで教科書内容を全てきちんと生徒に理解させることは不可能である。Oral Introduction に続く explanation で教科書を開かせて、生徒と一緒に

に本文を読み合わせながら説明をしていく。この際、英語で進めることもあろうが、日本語を使用することが多いであろう。

"*Furoshiki—The Magic Cloth*" の例にあるように、

Now *furoshiki* have many good points.
One good point is that they are eco-friendly. What are their other good points?
Read the text of Lesson 7 through by yourself, and fill in the blanks in the text.

というような reading question を投げかけて、生徒に教科書本文を通読させ、答え合わせをしてから explanation を行う。(場合によって、listening questions を与えて、教科書の CD を聞かせる場合や、Oral Introduction の概要を確認させるために、graphic organizers (summary chart) を載せたハンドアウトを生徒に配り、それに記入させることも考えられる)

最近、このあとにつづく explanation がほとんどないまま、つまり教科書本文の内容理解が不十分なまま、"*Reading Aloud*" (音読) に進んでしまう授業をよく見かけるが、これでは内容理解を伴った音読にならないので注意したい。よく言われるように、Oral Introduction で教科書本文の内容について 100% の理解を保障できないのであるから、explanation でそれを補完することが必要である。

なお、本稿で扱っているのは、教科書本文をほとんど full にカバーする Oral Introduction であるが、教師側の狙い、生徒の英語に関する習熟度、大学入試との関係などの要素によって Oral Introduction でカバーするのは本文の一部 (partial) だけで、それを足がかりにして、残りの大部分を生徒のリーディング活動に充てるというのも十分にあり得ることである。

9. Oral Introduction の教室風景

(1) Oral Introduction をやっている時、面

白いことにぶつかることがある。かつて, "A Talking Gorilla" (*Spectrum English Course I*, 桐原書店) で, メスのゴリラのココに絵本を見せながら教えている教科書の写真を拡大コピーしたものを黒板に貼りながら, "Now Dr. Patterson is teaching sign language to Koko." とやったら, 数人の生徒から驚きの声があがった。彼らはDr. Pattersonという教科書の記述を読んで, Dr. Pattersonは男性だと思いこんでいたのである。たまたま教科書の写真にキャプションがついていなかったせいもあるのだろうが, こういう細かいところでも Oral Introductionの効用はあるものである。

(2) 「児童労働」に関する英文を扱った英語IIの教科書では, 本文にはインドの紅茶屋台で働く6歳の子どもの例が紹介されている。この子どもの例をそのまま英語で導入するのはもう一つ芸がないと考え, パキスタンでサッカーボールを縫う架空の11歳の少年パブロ君について語った。"...Pablo works ten hours a day. It

takes him about five hours to make a soccer ball. So he makes only two soccer balls a day. How much does Pablo get? Can you guess?" と問いかけたところ, 「千円!」「三千円!」などの声が生徒から返ってくる。そこで, "Pablo gets about 40 yen by making two soccer balls." と伝えと, 生徒から驚きの反応が。

"Children have to work hard every day, but they get only a little money." と締めくくる。さらに, "Pablo does not go to school because he has to work hard every day. He makes soccer balls without going to school. Why does he have to work hard every day?" という質問に, Hさんがすかさず, "Support his family." と英語で返してきた。これは前時のパート2でやったRetellingで扱った表現である。授業で覚えた表現を見事に新しい文脈で使えたという実例である。今回は生徒に身近なサッカーボールを取り上げたことが功を奏したわけだが, とても印象に残る授業の一コマとなった。

10. 教科書本文とそれに関するOral Introductionの実例

(1-1) 教科書本文

Lesson 7 So Many Countries, So Many Laws

Part 1

Every society makes laws to protect its way of life. By looking at a country's laws, we can learn something about the culture of that society. We can also understand what is important to its people. Sometimes these laws may surprise outsiders.

In Switzerland, for example, you can't hang out laundry on Sundays. It is also against the law to use a power lawn mower on Sundays because it is too noisy. These laws tell us that Sundays are very important to the Swiss. (84 words)

Part 2

Some laws in other countries may be too strict for Japanese people. In Singapore, if you litter, you will be arrested. If you do it three times, you will get a severe punishment. You will be ordered to clean the streets, and this will then be broadcast on the local news.

There is another strict law in Singapore. Although many Singaporeans love a fruit called durian, they can't take a durian on a bus or a subway. In fact, eating a durian is not allowed in many public places. That is because durians have a strong odor! (95 words)

Power On English I (東京書籍, 2008)

(1-2) reviewから Oral Introductionへ

[review]

OK. Let's review the last lesson. In the last class, we looked at some laws of a country in Europe. Do you remember the name of the country? Yes, Switzerland. (Class, please repeat.) Switzerland. Right. Look at this picture. What is the man doing? Yes. He is hanging laundry out. (Class, repeat). He is hanging laundry out. How about this girl? What is she doing? Yes. She is using a power lawn mower. What is the police officer saying? He says, "Sunday!" So, in Switzerland, you mustn't hang laundry out on Sundays. And it's against the law to use a power lawn mower on Sundays. (Repeat) (106 words)

[Oral Introduction]

Today, we are going to look at the laws of an Asian country. Please look at this map. Can you guess what the name of this small country is? Yes. This is Singapore.

What's this? Yes, this is chewing gum. Do you like chewing gum? I don't like it. Why? Chewing gum is not good for my teeth. Now I'm going to ask you a question: What will you do with chewing gum after you finish it? OK. There are three choices:

- 1) wrap chewing gum with paper and throw it away into a trash can
- 2) throw away chewing gum into a trash can without wrapping it with paper
- 3) throw away chewing gum on the street

Please raise your hand. You have good manners. Some high school students, however, have very bad manners. They do 3). If some students do so, a teacher will scold them in Japan. In Singapore, however, if you throw away chewing gum on the street, you have to pay some money because it is against the law. So you have to pay a fine. How much? You have to pay 500 Singapore dollars. One Singapore dollar is about 70 yen now. So it's about 35,000 yen. So you must not throw away chewing gum in Singapore. (Repeat)

Next, look at this. Do you know what this is? This is a fruit. This fruit looks like an egg or a ball. The color is yellow. It is grown in Southeast Asia. This fruit has many thorns. This fruit is sometimes called "the king of fruits." Yes, this is a durian. Have you ever eaten a durian? (If yes, how did you like it? Was it very good?) I have never eaten a durian. I want to try one some day. People in Singapore like this fruit very much. Singaporeans love durians. But they have some laws about this fruit. Look at this picture. Now this girl has a durian. Where is she? Yes, probably she is on a subway. Look at the other people. How are they feeling about the durian? It seems they don't like it. Why? Because it smells very bad. It has a strong odor. So, in Singapore, you must not take a durian on a bus or a subway.

Is it OK for you to eat a durian at home? Of course, it is OK. But you must not eat a durian in school, in the office, in a library—in public places. So eating a durian isn't allowed in public places. (Repeat) (423 words)

(2-1) 教科書本文

Lesson 7 *Furoshiki*—The Magic Cloth

Part 1

Do you know Wangari Maathai? She was a Kenyan environmentalist who received the Nobel Peace Prize in 2004. When she came to Japan in 2005, she was impressed by the word *mottainai*. It expressed in one word her ideas about respecting the environment. Ever since, it has been spreading around the world.

There are many eco-friendly customs in Japan. Using *furoshiki* is one of them. A *furoshiki* is a square piece of cloth that you use to wrap things in. If you use a paper bag, you may throw it away after using it. Maathai said, “Every time you use paper, remember that it is a cut tree.” Unlike paper, *furoshiki* can be used over and over again. (118 words)

Power On Communication English I (東京書籍, 2015)

(2-2) それに関する Oral Introduction

OK, let's start today's lesson. We are going to start reading a new lesson today. Please look at this picture. *Do you know who this is?* Yes, this is **Wangari Maathai**. She was born in Kenya in 1940. So she was a **Kenyan**. In the 1970s, many trees were cut down, and many forests were destroyed in Kenya. *Maathai thought about what she could do to change this situation.* Then, in 1977, She started planting young trees with local Kenyan women. Since then they have planted millions of trees across Kenya. This project is called the **Green Belt Movement**. Maathai was always thinking about the environment. *She felt it is important for everyone to have clean air, clean water and good land.* She was an **environmentalist**. Because she worked hard for the environment, **Maathai received the Nobel Peace Prize in 2004.**

When Maathai came to Japan in 2005, she heard some Japanese people using the word *mottainai*. If Japanese people use something just once, and then throw it away, they say *mottainai*. She soon came to love the word. She thought, “Wow! *Mottainai* is a great word! I love this word!” **She was impressed by the word *mottainai***, so every time she had a chance to make a speech, she said that the idea *mottainai* was very important to everyone in the world. Maathai died in 2011. However, the word *mottainai* is still used not only in Japan but also around the world. **The word *mottainai* has been spreading around the world since 2005.** Now *mottainai* is a kind of international slogan.

This picture was taken when Maathai visited Japan in 2006 for the second time. *Can you see what she was holding?* Yes, it is a *furoshiki*. Have you ever used a *furoshiki* before? What is a *furoshiki* made of? Is it made of paper? No, it is made of cloth. What shape is a *furoshiki*? Is it round? No, it is square. What do you use a *furoshiki* for? We use a *furoshiki* to wrap things in. So a *furoshiki* is a square piece of cloth that you use to wrap things in. *How many times can a furoshiki be used?* Yes, a *furoshiki* can be used many, many times. **It can be used over and over again.** So a *furoshiki* is **eco-friendly**. However, unlike a *furoshiki*, if you use a paper bag, you may throw it away after using it. A paper bag, which is made of wood, is not eco-friendly.

Now *furoshiki* have many good points. One good point is that they are eco-friendly. What are their other good points? Read the text of Lesson 7 through by yourself, and fill in the blanks in the text. (451 words)

*イタリック体の英文は前課 Lesson 6 で扱われた新出文法事項。太字（ボールド体）は生徒に繰り返しさせた語句と英文。「7. Oral Introduction を構成する際の工夫」を参照。

11. 結びにかえて

Oral Introduction は教師が生徒と一緒にくりあげていくものである。それは授業も同じである。そうした意味では、Oral Introduction はきわめて人間的で creative な営みなのである。

結びとして、大変魅力的な Oral Introduction をされるお二人の先生の言葉を引用して本稿の結びとしたい。ちなみに、お二人ともパーマー賞を受賞されていて、私が尊敬する先方である。

現代の英語の授業における O I（筆者注：Oral Introduction）の意義は次のようなところにある。

- (1) 教科書の英文にいのちを与える。
- (2) 教科書の英文と生徒の日常生活とを関連づける。
- (3) 総合的な英語力の育成につなげる。

(1) の「教科書の英文にいのちを与えること」というのは少々抽象的な言い方である。しかし、O I を実践している英語教師は実感的に理解できよう。文字として教科書に書かれている英文は、たとえそれが対話文であっても、実際の場面から遊離した抽象的なものである。それが expository な英文であれば一層執筆者の感情や個性があまり表面に出ないことになる。多くの生徒にとって教科書の英文は読解のための試験問題と同じで、単に意味がそこにあり、その意味と自分の意見や気持ちとは何の関係がない存在なのである。これでは、その英文をもとにしたコミュニケーション活動など生まれるはずは

ない。

一方、理想的な O I では、教師が自分の肉声で自分の経験や知識と関連させながら、語るのである。これにより、抽象的な英文が血や肉を帯びる。英文の中にある語句や表現が具体性を持って生徒に与えられる。これが O I の第 1 の存在理由である。この存在理由を生かすには、教師の方で教科書本文を深く読み込み、自分の理解をもとに、ある部分は強調し、ある部分は補足し、ある部分は軽く扱うなどの対応をして、語る必要がある。こうして初めて教科書は生徒の興味関心を引く生きた教材となる。

（「オーラル・イントロダクションの一層の活用に向けて」新里眞男 『語研ジャーナル 第 3 号』）

Oral Introduction を、読みの前に背景知識を与えるものと考え人もいる。しかし筆者は、文字の形で書かれているものを、自然に語られる音声として与え、生徒に音声で意味を理解させるためのものと考えている。もし文字を見ただけで Acoustic Image とそれに直結した意味が想起できる生徒ならば、Oral Introduction ではなく、その一歩先の活動を行えばよい。しかし教科書の文章を見てさらっと理解できないのであれば、やはり Oral Introduction は有効な授業過程であろう。

（「中学校の日々の授業とパーマーのことば」久保野りえ 『語研ジャーナル 第 1 2 号』）

【参考文献】

- (財) 語学教育研究所編著 (1988) 『英語指導技術再検討』大修館書店
- (財) 語学教育研究所編著 (2004) 『語研ジャーナル 第3号』語学教育研究所
- (財) 語学教育研究所編著 (2008) 『語研ブックレット2 指導手順再検討』語学教育研究所
- (一財) 語学教育研究所編著 (2013) 『語研ジャーナル 第12号』語学教育研究所
- 萩原一郎「Oral Introductionの工夫と位置づけ」(2013)『英語教育』2013年4月号(第62巻 第1号)大修館書店
- Harold E. Palmer (1921) *The Principles of Language-study* World Book Company
- Harold E. Palmer and Dorothée Palmer (1929) *English Through Actions* 開拓社
- 村野井 仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 白畑知彦・富田祐一・村野井 仁・若林茂範 (2012) 『英語教育用語辞典』大修館書店